■研究ノート

「東北北半から北海道南西部にわたるクマ意匠が意味するもの」

女　鹿　潤　哉（主任専門学芸員）

1　津軽海峡をはさむ共通文化圏

縄文～弥生時代、東北地方北半から北海道南西部を中心として、クマを意匠したと考えられる造形（以下、**クマ意匠**と表記）が製作されています。**クマ意匠**には、クマそのものをかたどったもの、土器や土製・石製・骨角製品などの一部としてクマをあしらったものが知られています。こうした動物形には、**クマ意匠**の他、イノシシ・シカ・イヌ（またはオオカミ）などとみられるものがあります。また、この時期には、土製や石製の人形（ひとがた）である土偶、石偶、一部に人体をあしらった土器などが作られたことも知られています。

これら動物形や人形は、日常の生活用具やおもちゃなどではなく、その出土状況などから、信仰に根ざした祭祀の道具であったと考えられています。また、**クマ意匠**は、東北地方南部以南の地域には、ほとんど知られておらず、東北地方北半から北海道南西部にわたる地域に特有な造形ということができます。このことから、この地域には、クマに対する何らかの信仰に基づく祭祀（まつり）（以下、**クマ祭祀**と表記）が行われていたと考えられます。

東北地方北半から北海道南西部にかけての地域は、ほぼ縄文時代早期～弥生時代中期（およそ9000～2000年前）、土器の様式や道具を始めとする生活・文化の面で、共通性の強い文化圏（以下、**共通文化圏**と表記）を構成してきました。**共通文化圏**で「共有」された文化の内容をみると、信仰や価値観に根ざすものも多く含まれることから、精神文化の上でも密接に結びついていたことがわかります。このことから、**共通文化圏**では、共通のクマ祭祀を背景とするクマ意匠を共有したものと理解できます。

2　共通文化圏のクマ意匠

表（1）（2）から、一連のクマ意匠は、縄文時代中期（およそ5000～4000年前）頃に北海道中央部を中心として成立し、

N	遺跡名	市町村	種別	数	時期
	岩手県				
1	山屋	玉山村	土製品	1	縄文後～晩期
2	外山Ⅳ	滝沢村	同上	1	同上
3	臥牛	北上市	同上	1	同上
4	立花館	同上	同上	1	同上
5	七折	同上	同上	1	同上
6	上杉沢	浄法寺町	同上	2	縄文晩期～弥生初頭
7	野原Ⅱ	石鳥谷町	同上	1	同上
8	君成田	軽米町	同上	1	弥生初頭
9	馬場野	同上	同上	1	弥生中期
10	上野B	一戸市	土器口縁	1	同上
	青森県				
11	近野	青森市	土器底部	1	縄文後期
12	三内丸山（6）	同上	石皿の一部	1	同上
13	同上	同上	土製品	2	同上
14	同上	同上	土器口縁	2	同上
15	永木沢	大畑町	土製品	2	同上
16	二ツ石	今別町	土器底部	1	同上
17	十腰内	弘前市	土製品	1	同上
18	上尾駮	六ヶ所	土器底部	3	同上
19	伍龍ヶ岡	木造町	土製品	1	縄文後～晩期
20	十面沢	弘前市	土器口縁	1	縄文晩期
21	尾上山	同上	土製品	1	同上
22	江渡沢	むつ市	土器口縁	1	同上
23	蒲地	七戸町	石棒線刻	1	同上
24	滝端	階上町	石製品	1	同上
25	砂沢	弘前市	土器口縁	3	縄文晩期末～弥生初期
26	同上	同上	土器の蓋	1	同上
27	同上	同上	土製品	1	同上
28	牧野Ⅱ	同上	同上	1	同上
29	大曲	鰺ヶ沢町	土器口縁	1	同上
30	二枚橋	大畑町	同上	1	弥生前期
31	瀬野	脇野沢	同上	2	同上
32	戸沢川	川内町	同上	7	同上
33	勤七沢	同上	同上	1	同上
34	不備無	同上	同上	1	同上
35	室戸	同上	同上	1	同上
36	梨ノ木平	むつ市	同上	2	同上
37	小山田（2）	三沢市	同上	1	同上
38	弥次郎	八戸市	同上	1	同上
39	大蛇	階上町	土器体部	1	同上
40	畑内	南郷村	石製品	1	同上
41	字鉄Ⅱ	三戸村	土器把手	3	弥生中期
42	高根Ⅰ	田舎館村	土器口縁	1	同上
43	泉地内	同上	土器把手	1	同上
44	亀柳	同上	木製柄杓	1	同上
45	同上	同上	土器つまみ	1	同上
46	湯ヶ森	弘前市	土器口縁	1	弥生
	秋田県				
47	小坂環状列石	小坂町	土製品の一部	1	縄文後期
48	大湯環状列石	鹿角市	土器底部他	5	同上
49	同上	同上	土製品	1	同上
50	大森Ⅰ	小坂町	土器把手	1	弥生後期
	宮城県				
51	嶺塚貝	迫町	土器口縁	1	縄文前期
52	沼津貝塚	石巻市	土製品	1	縄文後期～晩期
	山形県				
53	蛇塚	東村江市	土製品の一部	1	縄文後～晩期

表（1）東北地方のクマ意匠出土遺跡（縄文～弥生時代）

N	遺跡名	市町村	種別	数	時期
	南部				
1	静狩	長万部町	石製品	2	縄文中期
2	コタン温泉	八雲町	土器口縁	1	同上
3	栄浜1	同上	同上	1	縄文後期
4	コタン温泉	同上	土製品	2	同上
5	石倉貝	函館市	土器口縁	2	同上
6	茂辺地	上磯町	土器把手	5	縄文晩期
7	日ノ浜	恵山町	同上	2	同上
8	下添山	上磯町	同上	2	続縄文前半
9	茂別	同上	土器の一部	24	同上
10	恵山貝	恵山町	同上	6	同上
11	同上	同上	骨器	6	同上
12	尾白内	森町	土器把手	1	同上
13	西桔梗	函館市	土器口縁	2	同上
14	幣川Ⅰ	七飯町	同上	1	同上
15	岩町	同上	同上	1	同上
	中央部				
16	八千代A	帯広市	土製品	1	縄文早期
17	静内高校校庭	静内町	石製品	1	縄文中期
18	山形	由仁町	同上	2	同上
19	西三河	同上	同上	1	同上
20	チウス4	千歳市	土製品	1	縄文後期
21	美々4	同上	土器把手	1	同上
22	大川	余市町	土製品の一部	1	縄文晩期
23	中島松7	恵庭市	同上	1	同上
24	刑務2	江別市	土製品	1	同上
25	滝里安井	芦別市	石製品	1	続縄文初頭
26	高砂	江別市	同上	3	同上
27	旧農平河畔	同上	同上	1	同上
28	トニカ	門別町	同上	3	同上
29	タプコプ	苫小牧市	土器口縁	1	続縄文前半
30	元江別1	江別市	同上	1	同上
31	祝津貝	室蘭市	骨器先端	1	同上
32	江別太	江別市	鹿角製装身具先端	1	同上
33	江別太	同上	木製装身具先端	1	同上
34	有珠10	伊達市	骨匙	1	同上
35	K37	札幌市	土器口縁	1	同上
	北東部				
36	ニツ山第3地点	標茶町	石製品	1	縄文早期
37	穂香竪穴群	根室市	土器口縁	1	縄文後期
38	常呂川河口	常呂町	石製品	1	続縄文初頭
39	栄浦1	常呂町	石製品	1	同上
40	旭ヶ岡	旭川市	同上	1	同上
41	峰草2	常呂町	土器口縁	1	続縄文中期

表（2）北海道のクマ意匠出土遺跡（縄文～続縄文時代）

縄文時代後期（およそ4000～3000年前）には、北海道南部や東北地方北半にも広まったと考えます。そして、縄文時代晩期～弥生時代（北海道では、続縄文時代）前期に最盛期を迎え、弥生（続縄文）時代後期までには消滅しています。また、図（3）をみると、東北地方北部から北海道南西部が中心で、東北地方

図版3　クマ意匠出土遺跡分布図[縄文～弥生(続縄文)時代]
遺物図版左は北海道(佐藤智雄氏集成)、右は岩手県(日下和寿氏集成)[ともに東北学院大学民俗学OB会編『東北民俗学研究』第6号掲載動物形より抜粋]

中部や北海道北東部には散発的にみとめられるに過ぎません。

3　クマ意匠と祭祀

クマ祭祀といえば、北海道などのアイヌ民族が飼育した子グマを神の国に送る儀礼であるイオマンテ（いわゆるクマ祭）、あるいは東北地方山間の狩猟集団であるマタギが行う狩猟儀礼が思い起こされます。

アイヌ民族には、クマは、本来聖なる山上の神の国に住み、時として、黒い毛皮をまとって人間界に訪れたもので、善良なアイヌに毛皮やキモ、肉をみやげとして与えるかわりに、丁重な儀式を行って神の国に送り返してやれば、再び自分たちのもとにやってくるという信仰があります。こうしたことから、アイヌ民族は、クマを捕獲すると、神のおみやげである毛皮やキモ、肉をいただき、クマの霊をねんごろに祭り、木幣（ぼくへい）などの供物をみやげとして持たせ、神の国へ送り返す儀礼を行うのです。

また、東北地方山間に住む狩猟集団マタギにも、クマを始めとする狩猟動物への祭祀が知られています。例えば、青森県下北半島のマタギは、クマを狩猟すると、山中で解体して集落にもどった後、頭部を毛皮の上に置いて祭るなど、マタギには、クマの解体や頭部の扱いなど、アイヌの場合と通ずるところが少なくないと考えます。マタギのクマ祭祀には、密教（仏教の一流派）の影響が色濃くみとめられますが、外来宗教である仏教が広まる以前の祭祀のあり方を今に伝えているように思われます。

また、マタギの山言葉には、今日のアイヌ語と共通することばがいくつか知られるなど、アイヌとマタギには、他にも共通性もみとめられます。さらに、東北地方北半には、山間や沿岸を中心としてアイヌ語で解釈できる地名が多く見られます。このことは、かつて津軽海峡をはさんで密接な交流があった共通文化圏が、クマに対する共通の信仰と儀礼を共有してきたことの名残とは考えられないでしょうか。

4　クマ意匠が意味するもの

弥生時代後期（およそ2000年前）に入ると、東北地方全域に、天王山式土器とそれに伴う文化が広がります。すると、それまで東北地方の各地にみられた地域的な特色は失われていきます。一方、北海道側でも、それに少し遅れて、中央部を中心として用いられていた後北C_1式～C_2・D式土器とそれに伴う文化が劇的に全域に広がります。こうして、東北地方北半とともに共通文化圏を構成してきた北海道南西部でも地域的特色が失われることから、この時期に共通文化圏は解体したと考えられます。

時を同じくして、弥生（続縄文）時代後期には、クマ意匠もまた消滅しています。先にも述べたように、クマ意匠は、クマ祭祀を背景として製作されたと考えられますので、天王山式土器、並びに後北式土器に伴う文化にはクマ祭祀がなかったか、極めて不振であったと理解されます。

北海道の後北C_2・D式土器に伴う文化の系統は、その後、擦文文化を経て、アイヌ文化に連なっています。アイヌのクマ祭祀には、樺太（サハリン）などに起源をもつオホーツク文化が大きな影響を与えたと考えられていますが、共通文化圏のクマ祭祀とも複合していると理解するものです。また、先に述べたように、マタギのクマ祭祀にも、外来の密教の影響がみられました。こうしたことから、東北地方北半のマタギ、並びに北海道などのアイヌのクマ祭祀は、それぞれ外来の宗教、信仰の影響を受けて変化してはいるものの、遠く共通文化圏の時代におけるクマ意匠、並びにクマ祭祀の名残を伝えているものと考えます。

この研究ノートは、主として『岩手県立博物館研究報告』第16号・同第17号、『祭祀考古学』第2号、『北海道考古学』第36輯に公表した拙稿に基づいて作成しました。